

須恵器壺Hの一考察

奈良 美穂

須恵器壺Hは、従来出土例の少ない器種であったが、最近の発掘調査により、井戸から土馬と共に出土した例、壺内に銭を納めて土壙に埋納されていた例などが明らかになり、祭祀に用いられた特殊的なものではないかと推察されるようになった。¹⁾だが、その用途については不明瞭な部分が多い。本稿では、各地域出土の壺Hを比較検討することにより編年的位置づけをし、また用途に関して若干の考察を行ないたい。

I 須恵器壺Hの製作技法

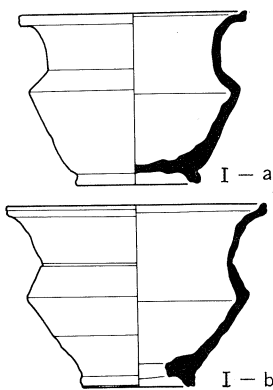
壺Hとは

平城宮・京の土器の呼称は、土器の形態から幾つかに類別された器形を記号化して示されている。この呼称法は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅱ』において明示されて以来、途中で器種名などが改変されたものもあるが、基本的には現在まで受け継がれている。ここでとりあげる壺Hとは、『平城宮発掘調査報告Ⅵ』に示されているように「巾の狭い肩部に稜をもつ扁平な体部に、直立する比較的長い頸部と大きく外反する広口の口縁部からなる小型の器」を指すものである。平城宮・京以外の地域で出土した同形態の壺も、平城宮・京の呼称法に準拠して、壺Hと呼ぶことにする。

製作技法

壺Hの成形法は、体部と頸部を別々に巻きあげて大方の形をつくりだしたのちにロクロ²⁾の回転を利用して細部を引きだすという粘土紐巻き上げロクロ成形法を採る。ロクロから

土器を引き離す際には、へらをさしこんで離す方法（へら切り）とロクロの回転を利用して糸で離す方法（回転糸切り）の2種類がある（図版一7）。大半のものが前者の方法を採り、底部外面はへら切りのままで調整を加えるものはほとんどない。



形態分類

壺Hは、高台の有無により2つに分類できる。本稿では、高台が有るものをⅠ類、無いものをⅡ類とし、さらにⅠ・Ⅱ類は、口縁部の差により、以下のように細分する。

Ⅰ類—a 狭い肩部をもつ体部から、ほぼ垂直にたちあがる

頸部と外反しながらたちあがる口縁部をもつ。口縁

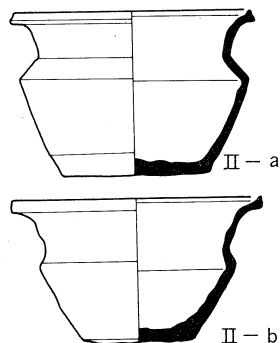
第1図 形態分類(1)

端部は上方へつまみだされている。

I 類一b 狭い肩部をもつ体部から、外反しながらたちあがる口頸部をもつ。口縁端部は、I 類一a 同様、上方へつまみだされている。

II 類一a 狭い肩幅をもつ体部から、外反しながらたちあがる口頸部をつけたもの。口縁端部は、斜め上方へつまみだされている。

II 類一b ほとんど肩幅がない体部からすぐに外反しながらたちあがる口縁部をつけたもの。口縁端部は、垂直につまみあげられているものと斜め上方につまみだされたものがある。



第2図 形態分類(2)

II 各地域出土の壺H

1. 平城京出土の壺H

平城京出土の壺Hは、現在までのところ17地点で50点ある。形態別による内訳は、I 類一aが2点、I 類一bが31点、II 類一aが1点、II 類一bが14点、破片のために分類不可能なものが2点である。以下、同一形態ごとにまとめて説明する。(第3図参照)

I 類一a 前川遺跡・井戸出土³⁾(1)、左京六条三坊十坪・東堀河出土⁴⁾(2)のものがあある。口径11.8cm、器高8～8.7cmを測る。いずれも灰白色を呈し、焼成は軟質である。胎土は精選されている。いずれも、口縁部内外面から体部下半にかけてロクロナデ調整をしている。底部外面はヘラ切り痕が残る。1は体部下半から高台にかけて二次的な焼成を

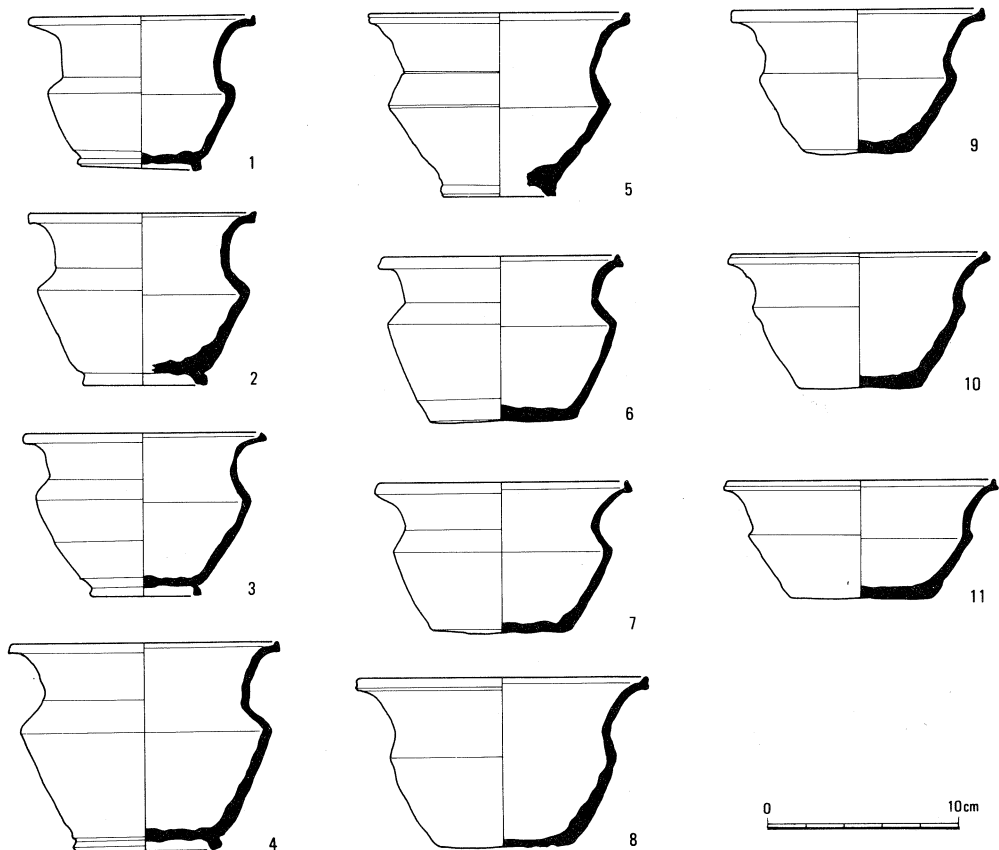
番号	遺 跡 名	出土遺構	個 体 数		伴 出 遺 物
			I 類	II 類	
1	左京二条六坊十一坪	S K2847	—	5	三彩小壺・土馬
2	左京三条二坊三坪	S K2982	1	—	和銅開珎2枚
3	左京五条五坊七・十坪	S D01	2	—	
4	同	S A05柱掘形	1	—	30cm大の自然石
5	左京六条三坊十坪	東堀河	5	2	人面墨書土器・土馬
6	左京七条二坊六坪	S E01	—	1	斎串・灯明皿
7	左京八条一坊三・六坪	S G3500	1	3	土馬
8	左京八条三坊六・十一坪	S D001	—	1	
9	左京八条三坊十一坪	東堀河	—	2	人形・土馬・人面墨書土器・小型模造品
10	左京九条三坊	東堀河	1	1	人面墨書土器・土馬・人形・斎串・銅鈴
11	左京九条大路	S D14	1	—	
12	同	S D2440	1	—	小型模造土器
13	左京八条一坊十一坪	S D920	18	—	人面墨書土器・小型模造土器・土馬・鈴
14	同	S E930	1	—	呪符を記した墨書土器
15	朱雀大路	包含層	1	—	
16	大安寺賤院推定地	S E01	1	—	斎串・墨書土器
17	前 川 遺 跡	井戸2	1	—	土馬

第1表 平城京内の出土地一覧

受けており、器面の剝離が著しい。(図版一1)

I 類一b 左京三条二坊三坪・土壙出土⁵⁾(3)、左京五条五坊七坪・掘立柱塀柱掘形出土⁶⁾(5)、大安寺賤院推定地・井戸出土⁷⁾(4)、左京八条一坊三坪・池出土のもの⁸⁾などがある。口径12.6~14.2cm、器高8.6~10.9cmを測る。色調は、灰白色~青灰色を呈し、焼成は軟質のものと硬質のものがある。4はロクロナデ調整。体部下半から高台にかけて一部に二次的な焼成を受けている(図版一3)。5は口縁部内外面をロクロナデ、体部下半をロクロ削りで調整している。底部は穿孔され、口縁端部の一部分には二次的な焼成を受けている(図版一2)。3は壺内に和銅開珎が2枚納められていた。左京八条一坊三坪の池から出土したものは、粘土紐の継ぎ目が十分に調整されずに残っているものや高台の貼り付け方が雑なものなど粗いつくりのものが多い。底部外面に墨痕がみられるもの(図版一4)もある。

II 類一a 左京六条三坊十坪・東堀河出土(6)のものがある。口径12.2cm、器高8.5cm



第3図 平城京出土須恵器壺H

を測る。色調は、基本的には茶灰色を呈しているが、口縁部から肩部までに重ね焼きの痕が残し、黒灰色となる。焼成は軟質で、胎土には砂粒が多く含まれている。口縁部内外面から体部中半までをロクロナデし、体部下半をロクロ削りしている。底部外面はへら切りののち軽くナデを加えて調整している。(図版一6)

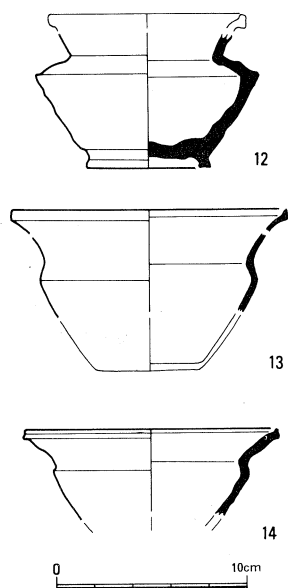
Ⅱ類一b 左京二条六坊十一坪・土壙出土⁹⁾、左京七条二坊六坪・井戸出土¹⁰⁾、左京八条三坊・条間路南側溝出土¹¹⁾、左京八条三坊十一坪・東堀河出土¹²⁾(10・11)のものがある。口径10～15cm、器高6.2～8.8cmを測る。色調は、灰白色～茶灰色を呈す。焼成は軟質のもの(8)と硬質のもの(9～11)とがある。9は口縁部内外面から底部外面に至るまで器壁におびたしいスガが付着している(図版一5)。10・11は口縁部内外面をロクロナデ、体部下半はロクロ削りで調整する。10は体部下半の一部分に二次的な焼成を受けている。

2. 平城京外出土の壺H

壺Hは、恭仁京・長岡京・平安京などからも出土しているが、平城京同様、出土例が極めて少ない。以下、各地域ごとにわけて説明する。

恭仁京 右京域に相当する上津遺跡で検出された奈良時代の溝から出土したものが10点ある¹³⁾。12は口縁部を欠損しているが頸部の残存状態からⅠ類一bに属すものと考えられる。暗灰色を呈し、焼成は良好である。

長岡京 京域の6地点から6点が出土している。右京五条一坊十一町・土壙出土¹⁴⁾、右京六条・西一坊大路東側溝出土¹⁵⁾、右京七条四坊十五町・旧河道出土¹⁶⁾、東二坊大路東側溝出土¹⁷⁾、左京三条二坊一・八坪の坪壇



第4図 平城京外出土の壺H

番号	遺 跡 名	出土遺構	個 体 数		伴 出 遺 物
			Ⅰ類	Ⅱ類	
1	上津遺跡	S D01	1	—	二彩小壺・人面墨書土器・土馬
2	同	包含層	1	—	
3	長岡京右京五条一坊十一町	S K6612	—	1	人面墨書土器・土馬・小型模造土器
4	長岡京右京六条一坊十六町	S D7701	—	1	灯火器・土馬・小型模造土器
5	長岡京右京七条四坊十五町	S D10406	—	1	人面墨書土器・土馬・小型模造土器
6	長岡京左京三条二坊一・八坪	S D12031	—	1	土馬
7	同	S D12032	—	1	土馬
8	長岡京東二坊大路	S D8901	—	1	土馬・小型模造土器・人形・斎串
9	平安京左京八条三坊	包含層	—	1	

第2表 平城京以外の出土地一覧

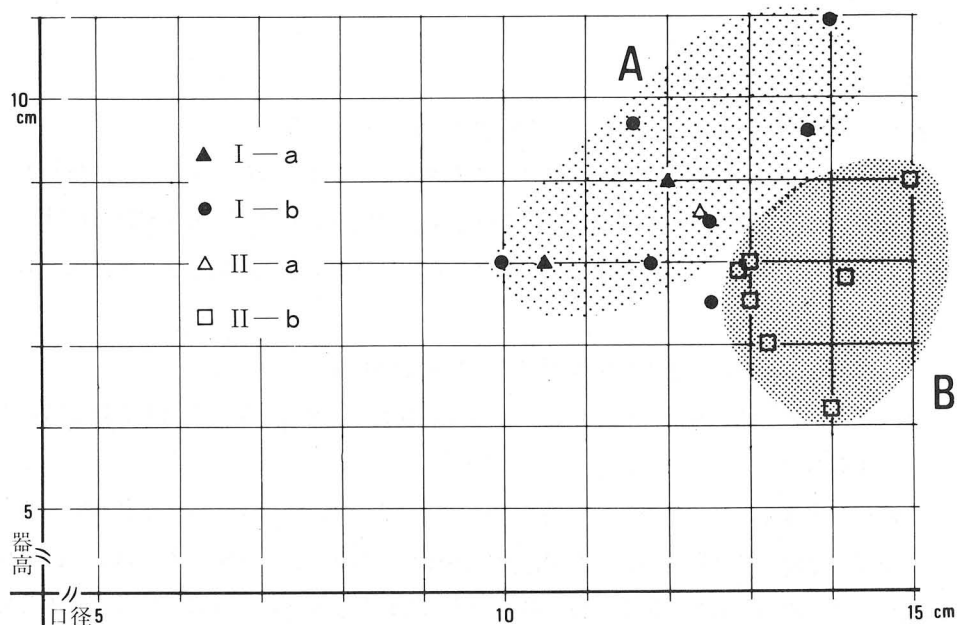
小路東側溝¹⁸⁾(13)、同西側溝のものがある。いずれもⅡ類一bに属す。口径11.8～14.6cm、器高約7～8cmを測る。色調は、灰白色～青灰色を呈し、焼成は軟質のものと硬質なものとがある。底部まで残存しているものが少ないため、全体の調整は明らかではないがおそらく口縁部から体部下半までをロクロナデで調整していると考えられる。13の口縁部には墨痕が残っている。口縁部外面にはススが付着しているものもある。

平安京 左京八条三坊の遺物包含層及び平安宮主水司跡から計2点出土している。¹⁹⁾Ⅱ類一bに属す。14は、口径13.4cm、底部を欠いているため詳細は不明だが、器高は6cm前後に復元できる。色調は灰褐色を呈し、焼成は軟質である。

この他に、大阪府陶器山21号窯、高蔵7号窯でも出土していることが知られている。いずれもⅠ類一aに属すものである。

Ⅲ 法量分布と年代

各地域で出土した壺Hの法量を形態分類別に示したものが下の図である。壺Hの法量分布を大別するとA：口径10～12.5cm・器高7.5～9.7cm、B：口径12.7～15cm・器高6～8.8cmの2つのグループにまとめることができる。Aグループは、筆者の分類によるところのⅠ類に相当するものが多く、Bグループに比べると器高が高い。Bグループは、Ⅱ類一bに相当するものが大半を占め、Aグループと比べると器高が低くなるが口径が大きくなる傾向にある。先にも少し触れたが、Ⅰ類は平城京から、Ⅱ類は長岡・平安京からの出土



第5図 法量分布図

例が多く、Ⅰ類とⅡ類の法量の差は、時期的な差としてとらえることができよう。では、その年代について以下、検討する。

Ⅰ類－aは、大阪府陶器山21号窯及び高蔵7号窯、前川遺跡、平城京左京六条三坊十坪（東堀河）などから出土している。田辺昭三氏の編年によると、陶器山21号窯は8世紀前葉に、高蔵7号窯は8世紀後葉に位置づけられており、少なくともⅠ類－aは8世紀全般を通じて存在していたことになる。前川遺跡の井戸枠内からは、平城宮土器Ⅲに相当する土師器・須恵器が出土しており、時期的には矛盾しない。Ⅰ類－bは、平城京左京三条二坊三坪、大安寺賤院推定地から出土している。大安寺賤院内の井戸内では、平城宮土器Ⅲに相当する土師器・須恵器が伴出しており、その時期をうかがうことができる。Ⅱ類－aは、類例が少ないため、現段階では時期は不明である。Ⅱ類－bは、平城京左京七条二坊六坪、左京八条三坊十一坪（東堀河）、長岡京右京五条一坊十一町、平安京左京八条三坊などから出土している。平城京左京七条二坊の井戸内からは、平城宮土器Ⅴに相当する土師器・須恵器が、長岡京右京五条一坊十一町の土壌からは長岡京期の土器群が出土している。伴出遺物などから、8世紀後葉に位置づけられるものである。しかし、平城京左京八条三坊、平安京左京八条三坊から出土したⅠ類－bは、9世紀中葉に相当する土師器・須恵器と相伴しており、少なくともこの時期まで存続していたことがうかがえる。

以上みてきたように、Ⅰ類は8世紀全般を通じて存在していた可能性はあるが、都が平城京から長岡京へと移った段階でⅡ類の形態が主流になっていったことが察知できる。

Ⅳ 出土状態の検討

次に、壺Hの出土状態を検討し、その用途について考えてみたい。

各地域で出土した壺Hは、現在までのところ約60点知られており、平安宮の例を除き、いずれも平城京・恭仁京・長岡京などの京域を中心に出土している。条坊道路の側溝、土壌、池、井戸など様々な遺構から出土しているが、壺Hの出土状態には2つの傾向があることがわかる。

- ① 柱掘形あるいは小土壌の中に埋納された状態のもの。
- ② 溝、土壌、池、井戸などから、人面墨書土器・土馬・人形などの祭祀遺物と共に出土するもの。

①に相当するものは、平城京に2例ある。左京三条二坊三坪の小土壌（SX2982）、左京五条五坊七坪の柱掘形（SA05）の出土例がそうである。SX2982のものは、壺内に和銅開珎を2枚納めており、遺構自体が特定の建物と結びつかずに三坪の中央部に位置していることなどから、地鎮め遺構であるとの見解が得られている。SA05のものは、壺内か

ら直接出土した遺物はないが、壺Hの底部が穿孔されていたり、柱掘形内から石と共に出土したことなどから考えても偶然に埋没したものとは考えにくい。SX2982と同様、あるいはそれに近い要素もっているのではなかろうか。

②に相当するものには、平城京で12例、恭仁京で1例、長岡京で6例ある。壺Hの出土状態はほとんどこれに含まれる。代表的なものとしては、平城京の東堀河、長岡京東二坊大路東側溝、大安寺賤院推定地の井戸、平城京左京八条一坊三・六坪の池、平城京左京二条六坊十一坪の土壇からの出土例がある。これらは、必ず祭祀遺物が共伴しており、祭祀行為の中で共に使われていたことを示唆するものと判断することができる。では、その祭祀的行為の中における壺Hの用途とは何であったのだろうか。幸いにも、用途を考える上で好資料を得たのでここに紹介しておく。平城京左京七条二坊の井戸、大安寺賤院の井戸、平城京左京六条三坊の東堀河から出土した壺Hは、体部下半あるいは口縁部から底部外面にいたるまで二次的な焼成を受けていた。当時の須恵器は、一般的には貯蔵用又は供膳用として使われ、火に直接かけることはない。だが、これらの須恵器にはあきらかにその形跡があり、火を使う過程において使用されたことは明白である。

以上みてきたように、壺Hの用途には少なくとも3種類あることがわかる。1つには、壺内に銭などを納めて地鎮を目的とする祭祀用具として、2つめは、人面墨書土器や人形などの祭祀遺物と共に使用し、溝・井戸・土壇などに投げこむものとして、3つめは、火を使う過程において使用されたものである。後者の2例は、祭祀遺物が共伴してはいるものの、いかなる祭祀で使用されたものかを知る上で、直接に示す状態で出土したものがないため現段階では明らかではない。

V ま と め

これまでに述べてきたことを再度要約してまとめとしたい。

須恵器壺Hは、8世紀前葉～9世紀中葉にかけて存在し、全般的にその出土例は少ないが大半のものが都城遺跡から出土しており、極めて「都市的」な土器であるといえよう。これらの土器は、出土状態から考えて、単なる貯蔵用又は供膳用の土器としては考えにくく、何らかの祭祀に使われていた可能性が強い。これらの祭祀の実態を把握するまでには至らないが、壺H自体の出土が宮域からのものがほとんどなく、京域を中心に出土していることなどを考慮にいと、国が関与した祭祀というものではなく、むしろ私的な性格をもつ祭祀としてとらえられるものではないだろうか。これらの問題点を含めて、今後さらに検討をかさねていきたい。

小稿をまとめるにあたって、奈良国立文化財研究所 巽淳一郎、奈良女子大学 坪之内徹、向日市教育委員会 秋山浩三、京都大学 不破 隆の各諸氏に観察の便宜、御教示を賜った。記して感謝いたします。

- 1) 森 郁夫「平城京の土器埋納遺構」『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』（奈良県教育委員会・1985）
 - 2) 巽淳一郎「第四章―3 土器」『平城宮発掘調査報告Ⅻ』奈良国立文化財研究所学報第42冊（奈良国立文化財研究所・1985）
 - 3) 奈良市「Ⅱ 前川遺跡発掘調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』（1974）
 - 4) 奈良市教育委員会「平城京左京三条三坊十坪（東堀河）の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』（1985）
 - 5) 奈良国立文化財研究所『平城京左京六条二坊三坪発掘調査報告』（1984）
 - 6) 本調査は既に報告されているが、堀立柱掘SA05の柱掘形から出土した壺Hについては未報告である。
奈良市教育委員会『平城京左京五条五坊七・十坪発掘調査報告書』（1983）
 - 7) 奈良市教育委員会「大安寺旧境内の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和60年度』（1986）
 - 8) 奈良県教育委員会『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告』（1985）
 - 9) 奈良女子大学「大学院・一般教養棟予定地の調査」『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報 Ⅱ』（1984）
 - 10) 奈良市教育委員会「平城京左京七条二坊六坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和60年度』（1986）
 - 11) 奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査 I』（1984）
 - 12) 奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査 II』（1985）
 - 13) 木津町教育委員会「上津遺跡第2次発掘調査概報」『木津町埋蔵文化財調査報告書 第3集』（1980）
 - 14) 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所「長岡京跡右京第66次（7 ANMSA地区）調査概要」『長岡京市文化財調査報告書 第14集』（1985）
 - 15) 長岡京市教育委員会「長岡京跡右京第77次（7 ANKSM地区）調査概要」『長岡京市文化財調査報告書 第9冊』（1982）
 - 16) 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京跡右京第104次調査概要（7 ANOND地区）」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第1集』（1984）
 - 17) 向日市教育委員会「長岡京跡左京第89次（7 ANFZN―2地区）」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第13集』（1984）
 - 18) 向日市教育委員会「長岡京跡左京第120次（7 ANFZN―2地区）」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第18集』（1986）
 - 19) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊（1982）
- ※ 本稿で使用した第2図―2及び第2図―14は、それぞれの報告書に掲載されていた図面をもとに作成したものである。

